

# 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

## 報告書資料 復興支援 - 29

学校名・団体名	高森町立高森中央小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	深い学びの中で、豊かに思考・表現する児童の育成
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p><b>1. 活動に至る経緯</b></p> <p>現在、教育界においては、これからの国際社会を生き抜く上で必要とされる情報活用能力を児童に身に付けさせることが注目され、次期学習指導要領においても位置づけられた。今後、学習を支える資質能力として益々重視され、新たな学びとして実践研究されていくことが予想される。一方で、平成28年度初めに熊本地震が発生し、学校は避難所として活用された。そのため学校の本格的再開までに時間を要し、この新たな学びを実現させるための校内研修等の時間を充実させるまでには至らなかった。昨年度、本助成金をいかし、様々な研修に参加させていただいたことで、校内研修を活性化を図ることはできたが、まだ研修の機会が不十分であり、多くの先生方の研修の機会を保証できていないと考えた。</p> <p>復興が進む中で、本町も次第に活気づいてきている。そこで、昨年度から取り組んでいる情報発信型の授業デザインをいかし、復興が進む様子や再発見した地域のよさを工夫して伝える実践を行っていきたいと考えた。特に本年度は、校内研修を中心に恵まれたICT環境をいかした授業実践に取り組み、JAET 川崎大会やJSET 研究会、毎年行なっている本町の研究発表会(400人規模)では、多くの実践報告することができた。</p> <p><b>2. 活動時期</b></p> <p>平成30年5月～平成31年3月</p> <p><b>3. 活動対象</b></p> <p>高森町立高森中央小学校に所属する全児童・全職員・全保護者を対象とする。</p> <p><b>4. 活動のねらい・内容等</b></p> <p>(1)活動のねらい</p> <p>次期学習指導要領でも重視されている、深い学びの中で豊かに思考・表現することができる児童を育成する。校内研修を中心とした授業実践の中で、その基盤となる資質・能力の育成を目指し実践を積み上げ、その成果を本町の研究発表会等で広く公開していく。また、情報発信型の授業デザインによる対話的学びを実現することで、深い学びを促す。</p> <p>(2)主な活動内容&lt;一部&gt;</p> <p>①熊本地震の復興の姿を伝える情報発信 第6学年 国語科「ようこそ私たちのまちへ」 総合的な学習の時間(高森ふるさと学)「南阿蘇鉄道応援プロジェクト(南鉄応援団)」</p> <p>②プログラミング教育の展開 第5学年及び第6学年 総合的な学習の時間(高森ふるさと学)「低学年が喜ぶコンテンツを作ろう」</p> <p>③タブレット端末持ち帰り実践 第4～第6学年 算数・理科・社会における実践</p> <p>④研究成果の公開 高森町「教育の情報化」研究発表会(参加者400名)にて複数の授業を公開し、成果を披露することができた。 JAET 全国大会・JSET 研究会等にて実践の成果を公開した。</p> <p><b>5. 具体的実践</b></p> <p>①熊本地震の復興の姿を伝える情報発信</p>	

第6学年の国語科と総合的な学習の時間(高森ふるさと学)を活用して、熊本地震で被災した南阿蘇鉄道(高森～立野間)の復興を応援するプロジェクトを計画した。実施の際には、高森町地域おこし応援隊として高森町と契約をしている方及び熊本大学大学院生の協力を得ることができた。

右の表は、主な単元計画である。まず第一次では、高森町地域おこし応援隊の染田さんから、現在活動されている内容や今回児童が取り組む内容について説明をしていただいた。車掌体験ということで、最初は戸惑いがちだった児童も、大学院生からの支援を受けることで高い意欲を持って取り組もうとする姿が見られた。また、具体的なイメージを持たせるために実際に観光列車(トロッコ列車)に乗り、車掌の話を書く活動を行なった。【写真1及び写真2】

次に、実際にどんなことを伝えるのかをグループごとに話し合い、タブレット端末等を利用した調べ学習を展開した。今まで当たり前と思っていたことに驚きを持つ児童や、熊本地震のことを話題にあげながらも、復興が進んでいっている様子に気づく児童もあり、改めて地域を見直すことができた。また、車掌としての語り方をグループで話し合い、初めて南阿蘇に来た観光客にもわかりやすく話すにはどうすれば良いかについて議論を深めることができた。【写真3】

第三次では、観光客だけでなく児童の保護者を招待し、車掌体験を行なった。緊張気味ではあったが、これまで調べてきたことをユーモアを交えながら話をする児童の姿が見られた。保護者の方の中にも初めて乗車された方も多く、地元の方にも南阿蘇鉄道の素晴らしさを広げることができた。当日は、県内のテレビ放送局や新聞社、地域のローカルテレビ局も取材に訪れ、児童の様子を県内に伝えていただいた。実際に乗車された観光客の方からも好評で、たくさんの励ましの言葉をいただいた。【写真4】

次	主な学習活動
一 次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「南阿蘇鉄道応援プロジェクト」の概要について知る。</li> <li>・南阿蘇の素晴らしさを伝える車掌として観光列車に乗ることを知る。</li> <li>・体験乗車を行う。</li> </ul>
二 次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車掌として観光客に伝える内容を考える。</li> <li>・地域の魅力を調べ、原稿を作成し、グループで練習を行う。</li> </ul>
三 次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に観光列車に乗り、車掌として南阿蘇の魅力を伝える。</li> </ul>



【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】

## ②プログラミング教育の展開

2020年度から本格実施されるプログラミング教育についても実践を図った。導入期であることから、鹿児島大学山本准教授の支援のもと、鹿児島大学の大学院生と遠隔授業を通してのプログラミング教育を試みた。第5学年と第6学年の総合的な学習の時間(高森ふるさと学)を活用し、「低学年が喜ぶコンテンツを作ろう」という課題について考えさせた。第6学年ではscratch、第5学年ではMicrobitを活用した。まず、担任から課題提示を行い、この課題を解決するプログラムを考えさせた。考える中で、児童の思考は大きな広がりを見せ、専門的な知識を有しない担任では解決できない部分も多く出てきた。そこで、鹿児島大学の大学院生とWEB会議を行い、児童から質問し大学院生に解決のアドバイスをもらうようにした。自分たちに年齢も近い大学生であったこともあり、積極的に質問し課題を解決しようとする児童の姿が多く見られた。単元終末では、ミニ発表会を行い、外部評価という形で児童の作品に対して価値付けを行なってもらった。得意不得意が如実に表れがちなプログラミング教育において、どの児童も高い意欲の中で最後まで取り組むことができた。

## ③タブレット端末持ち帰り

昨年度から継続して、タブレット端末持ち帰りの実践を行なった。第4～第6学年の社会科・算数科・理科で実践を行い、その有効性を検証することができた。

## ④研究成果の公開

研究の成果を各種全国大会及び高森町「教育の情報化」研究発表会にて公開し、参加者の方から多くのご意見を頂いた。今後の方向性を確認することができた。

## 6. 子供たちへの効果等

年間を通して継続的な実践化を図れた結果、児童の学習意欲は高まり、地域に対する愛情を高めることができた。熊本地震から立ち上がる地域の活動に参画することができ、達成感のある取組となった。